

第14号

発行日：平成12年9月27日
発行者：医学部広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学医学部広報紙

医学部ウォーカー

- 1 面：医学部へのアイディア募集
 - 2 面：鵬桜医学振興会事業計画
 - 3 面：シリーズ新中央診療棟
 - 4 面：研究室紹介「法医学講座」
 - 5 面：夏期国際交流報告
 - 6~7 面：外部評価具体化委員会
 - 8 面：学士編入学制度視察報告
 - 9 面：基礎ソフトボール大会
 - 10 面：第4回 弘前国際医学フォーラム
- 題字 医学部長 遠藤正彦氏筆

両院中央診療棟竣工記念式



去る七月十七日、医学部
コミュニケーションセン
ターにおいて、学内外の来
賓を含むおよそ百名の出席
を得て、新中央診療棟竣工
記念式ならびに祝賀会が挙
行された。先号でも紹介し
たように中央診療棟は、平
成八年九月に着工され、平
成十一年十一月に竣工、本
年四月から稼働開始した地
上六階地下二階の施設であ
る。

記念式は原田病院長の挨拶の後、弘前大学吉田学長から医学部附属病院への大きな期待が込められた祝辞が述べられた。次に、病院長より新中央診療棟の概要について紹介があり、工事関係者への感謝状の贈呈をもって閉式となった。

引き続き来賓の方々は式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

引き続き来賓の方々には式典会場を後にして新中央診療棟へ向かい各部門の施設見学に回られた。放射線部の阿部教授をはじめとして、各部門では副部長、技師長の方々が熱心に説明され、予定時間では足りない程の混雑と盛況ぶりであった。いずれの部門においても見

新中央診療棟竣工 記念式典挙行される

—新世紀にふさわしい医療設備への期待に満ち溢れ—



平成十二年になって大学
医学部をとりまく環境は、
独立行政法人化、卒後臨床
研修義務化、全国の大学病
院での不祥事の多発に対す
る世間の厳しい目等、一段
と厳しくなった。

このような医学部をとり
まく環境の厳しさの中で、
当医学部の状況を考えてみ
たい。

最近、ある国立大学では
地元企業より外部資金数億
円を導入して基金を作り、
独立行政法人化に備えてい
るといふ。当医学部のよう
に、産業基盤の弱い地域を
立地としている医学部に
とっては望むべくもないこ
とである。大都市圏の大学
と地方の大学との地域間格

学部長
寄稿

医学部をとりまく 環境の悪化の中で

医学部長 遠藤 正彦

差が一段と進んでいるとみ
なければならぬ。当医学
部は独立行政法人化に向け
て、現在後援会鵬桜医学振
興会の公益法人化を急いで
これに備えようとしている。

卒後臨床研修二年義務化
も開始までの時間の問題と
なってきた。大都市圏の研
修指定の大病院は、既に大
量の研修医を受け入れてお
り、更に、病院の拡充整備
が一段と進んでいる。しか
し、本県内の病院の大半は、
ベット数二百床以下の小規
模病院で、開設者は財政的
に弱い地方自治体であり、
医療設備への投資どころか
人件費にあえいでいる病院
群である。したがって、首
都圏大病院との病院間格差

低下、そして教育・研究・診
療の質の低下をきたし、多
くの人の魅力のない大学と
映り、そのことはまた卒業
生を母校に残さないという
悪循環となつています。

そこで教職員、学部・大学
院学生諸君に、どうしたら
当弘前大学医学部が魅力あ
る大学になれるかのアイ
デアを募集します。この内
容は、多くの卒業生が残る

医学部ウォーカー
編集委員会

応募課題

魅力ある弘前大学医学部に転換させ
るための方策

応募資格

弘前大学医学部所属の教職員・大学
院学生・学部学生・医員・研修医

応募方法

原稿用紙3枚以内にアイデアとそれ
を実行するための方策等を書いて下
さい。

提出先

医学部ウォーカー編集委員会
(医学部総務課文書調査係)

提出期限

平成12年11月24日

審査

医学部ウォーカー編集委員会におい
て審査し15号医学部ウォーカー紙上
で発表

当選者及び賞

教職員・大学院生・医員・研修医
医学部ウォーカー特別賞 一名
(奨学寄附金10万円)
佳作 若干名
(奨学寄附金5万円)
学部学生
医学部ウォーカー学生賞 一名
(5万円相当の希望医学図書)
佳作 若干名
(2万円相当の希望医学図書)

当選者の応募論文は医学部ウォーカーに掲載致し
ます。尚、当医学部ウォーカーは、今後同様に懸
賞論文を継続的に募集します。

最近、各大学附属病院で
の医療事故の多発は、他人
事ではない。当医学部附属
病院では医療事故防止のた
めリスクマネジメントマ
ニュアルを作成した。しか
し、一方では、報道をにぎ

は開くばかりである。卒業
生に母校に残れとキャン
ペーンしても、受け入れ先
の現況からは迫力に欠ける。
幸い青森県主導で県内自治
体病院の再編成が進んでい
る。一方、当医学部附属病
院も外来棟、臨床研究棟の
改築は研修医の受け入れも
視野に入れて設計されてい
るので、改築と共に附属病
院のあり方が大きく変わる
ものと期待している。

旧帝大の大学院重点化が
終了し、次に旧医大クラス
の大学の部局化が進行し、
また、単科大学の他大学と
の統合・連合等、生き残り
をかけた動きが活発である。
これらの動きに乗り遅れた
大学、アクティビティの低
い大学、問題の多い大学は、
医師過剰と地方の人口過疎
化、そして、国家財政の悪
化から存続が危ぶまれかね
ない。大学院重点化大学と
重点化されない大学との大
学間格差が一段と進んでい
る。だからこそ当医学部は
メデイカルスクールを将来
構想として策定し、外部評
価を受けて、その準備にか
かっている。その前段階と
位置づけた三年次学士編入
学の導入は、概算要求中で
ある。この導入には将来を
見据えたカリキュラムの大
幅な変更が必要である。現
在これらの策定が進んでい
るところである。

当医学部は、全国国立大
学の平均的位置を目標に改
革を進めてきた。それは「ど
うせやるなら他より早く、
且つ、他でやらないこと」
を目標として、様々な改革
を実施した。そして、自己
点検評価を実施し、外部評
価を受け、その外部評価の
指摘事項を改善に向けて具
体化してきた。教員任期制
導入決定や、自己点検評価
に基づく文部省校費の傾斜
配分等である。その途中で
起こった幾つかの不祥事は、
医学部の最少構成単位とし
ての講座・医局の管理シス
テムと構成員のコミュニ
ケーションに問題のあるこ
とを示した。そこで、全国
的にも例のない講座のあり
方に対する外部評価を受け
た。間もなく評価結果が公
表されると思うが、極めて
厳しいものと予想される。

当医学部は生き残りをか
けて様々な改革を進めてき
た。その結果、英文論文公
表数の増加や、文部省科学
研究費の採択数の増加等、
大学のアクティビティを示
すバロメーターが少しずつ
好転している。だからこそ、
今度は講座・部門のあり方
を考えつつ、一層の改革を
進めねばならない。十月一
日からは保健学科も加わる。
一方では、当医学部をとり
まく環境は一層厳しくなっ
ていくであろう。

鵬桜医学振興会 平成12年度事業計画承認される

鵬桜医学振興会理事会理事 蔵田 潔
(生理学第二講座教授)

七月十八日にコミュニケーションセンターで鵬桜医学振興会理事会が開かれ、昨年度の決算および本年度の事業計画が承認された。本年度の事業計画の主な内容は以下の通りである。

医学生への奨励・厚生活動助成

本学部には全国的にも余り例を見ない学生用の百台のコンピュータが専用室に設置されている。しかし百人を超える学年があることから、不足分のコンピュータ機器の補充を昨年度にまず鵬桜医学振興会として三百一十万円で行った。さらに、学生の自習室が基礎棟に新たに整備されたが、このための補助として二百万円が充てられた。この自習室は学年を問わず利用度が高く、有用に機能している。さらに、学生の課外活動を充実させる目的で施設環境整備費が充てられた。利用度が高く、かつ改修・整備が必要なものと

によってベンチやフェンス等の改修・整備が行われている。また学生課外活動援助費として百万円が計上され、すでに授賞式が行われた。この授賞式については別項の記事を参照されたい。本年度は重点項目として解剖実習室のエアコンが取り上げられた。解剖実習室はこれまでエアコン設備が不十分であり、特に夏季の閉め切った実習室での解剖実習は学生への負担も大きかったが、三百六十七万円でエアコンが一新され、快適に実習が行えるようになった。また、本年度も学生課外活動援助費として百万円が予定されている。

医学の教育研究に 対する助成など

本年度から医学の教育研究の一層の向上を目的として、鵬桜医学振興会による医学部賞を設けることになった。これは特別賞(一件三十万円を二人)、奨励賞(一件十万円を二人)、若手教育研究助成金(一件五十万円を五人)から構成され

ている。特に若手教育研究助成金は本年度の科学研究費に不採択となった研究課題(講師および助手が研究代表者であるもの)を応募の対象とするユニークなものであり、すでに募集が開始されている。また、鵬桜医学振興会の広報活動として、新たに公開講座推進会議に対する助成(百万円)、弘前大学医師会の活動に対する助成(百二十万円)、医学部図書館の公開展示等に対する助成(百万円)、会費や寄付をしていただいた方々へ広報誌医学部ウォーカーを配布するための増刷分(百三十万円)が認められている。

振興会の会費・寄附金納入状況

本会は会員(医学部・附属病院教官や卒業生など)からの会費および学生の保護者や企業からの寄附金を主な収入源としており、昨年度は総額約三千百万円の収入を得ることができた。内訳は、会員である本学教官から一〇六万円(年会費一万円)、卒業生からは六百万円(年会費二万円)の納入実績であったが、二百五十名以上の定員に対する本学教官の納入率は極めて低いといわざるを得ない。上記のような会の事業内容を理解され、一人でも多くの教官からの会費納入をお願いしたい。また、昨年度は発足年度ということもあり、新入生のみならず、在学生の保護者の方々にも寄付をお願いした結果、総額約二千万円もの額となったことにこの紙面を借りて篤く御礼申し上げたい。これらの会費や寄附に加え、本年度は企業等にも広くご寄付をお願いしようと計画している。

科学研究費補助金交付 医学部に総額二億円

平成十二年度文部省・学術振興会科学研究費補助金の採択・交付が行われた。弘前大学医学部・附属病院では特定領域研究三件、基盤研究(A)五件、基盤研究(B)十三件、萌芽的研究(C)三十一件、萌芽的研究(D)三十一件、奨励研究(A)十七件、地域連携推進研究費一件の計八十三件で、配分総額は昨年度一億円を突破した。昨年度は二億五千万円に達し、二億五千万円であった。図1に見られるように、昨年度に続き、飛躍的に増加した。採択率をみると前年度とほぼ同一であった(図2)。一方、全国レベルで見ると、国立大学医学部四十二校のなかで、採択件数は昨年度の三十一位から二十八位とわずかながら上昇した(図3)。配分総額も二十四位と健闘している(図4)。北海道・東北地区九医学部の中でも、昨年度と比較すると採択数が六位から五位へ、配分総額が七位から五位に上昇した。平成十三年度の科研申請時期が近づいている。この上昇気流に乗って、飛躍すべく各教官の益々の努力が望まれる。

(中根 記)

医学部校費の傾斜配分実施

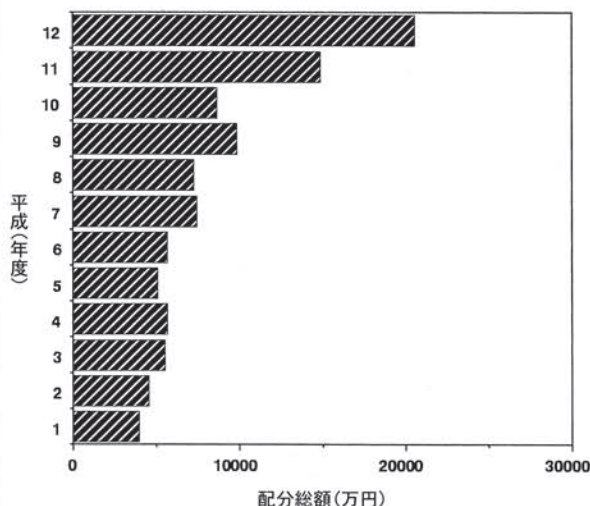
平成十二年度から文部省から国立大学への教育研究基盤校費の配分が変更された。校費教官当積算校費と学生当積算校費が教育研究基盤校費となり、積算方法が教官数積算分として修士講座非実験に、学生数積算分として文科相当に単価統一された。さらに、残りは学部分として配分され、学部分の割合が学部長裁量経費となった。一方、教育研究特別経費の文部省配分が廃止されたこともあり、医学部への配当予算は二千八

百万円減(前年度比六・一%減)となり、苦渋の予算立てとなった。これに伴い、医学部において、平成十二年度から講座配分当分の三十%につき傾斜配分の導入が決定され、医学部予算委員会において、その評価方法が検討された。それに従い、昨年三月に公表された「弘前大学医学部・附属病院自己評価報告書」一九九五年―一九九七年「のデータに基づき、研究四割・教育四割・管理運営二割の比率で、それぞれ

について各講座・部門がA・B・Cの三段階にランク付けされた。その結果、最高配分額と最低配分額の差は、基礎講座では百三十二万円、臨床講座では百三十四万円となった。評価方法については改善すべき点があるが、「努力したものは報われる」「働かざるもの食うべからず」が当然の一般社会に習って、傾斜配分導入が医学部各研究室・各人の発奮を促す起爆剤になるであろう。

(中根 記)

図1. 医学部・附属病院における科研配分総額の推移



振興会の法人化の 見とおし

本会は青森県の公益法人を目指しており、具体化に向けて準備中である。法人化の準備として、昨年度の総収入の中から二千万円を基本財産として繰入れている。本年度もできる限り基本財

産の繰入れを図る予定である。公益法人には目的別に財団法人と社団法人の二種類があり、本会がどちらを選択すべきかは県とも連絡を密に行うことになっている。また公益事業の内容などを具体化する必要もあり、法人のあり方を詰める作業が迫られている。

図3. 平成12年度国立大学医学部科研採択件数

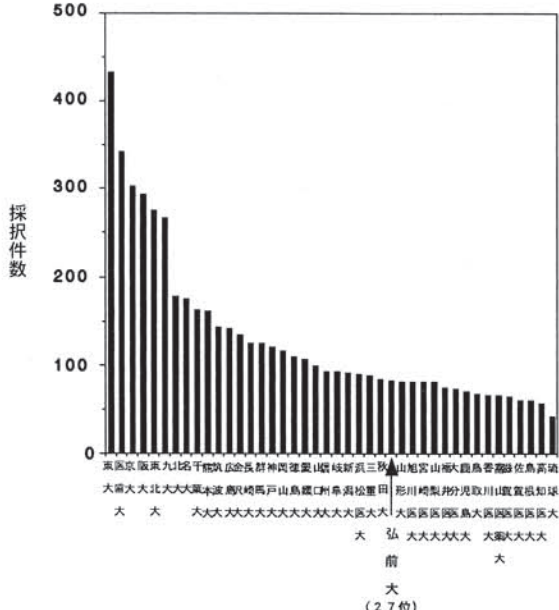


図2. 医学部・附属病院における科研採択率の推移

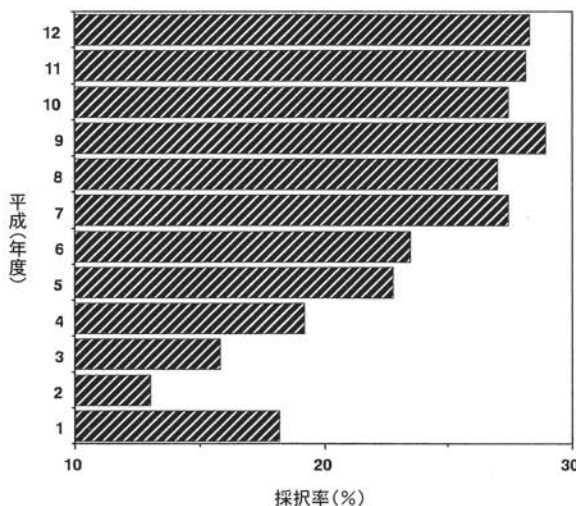
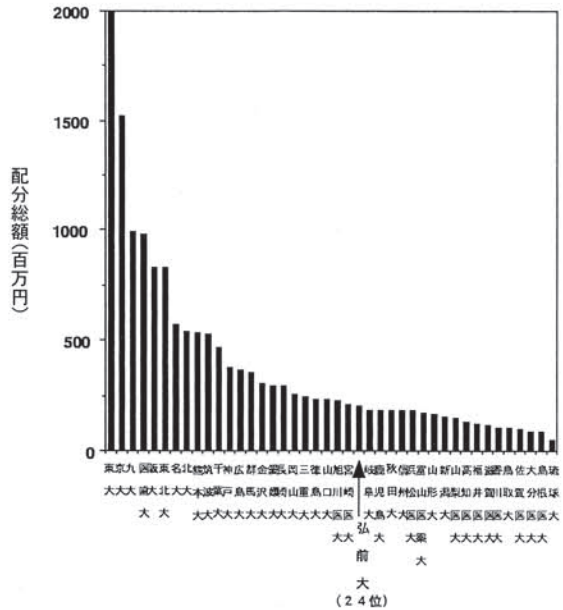


図4. 平成12年度各国立大学医学部科研配当総額



シリーズ 新中央診療棟

第1回

手術部（旧手術部と対比して）

手術部副部長 青木 紀道

どの診療部の歴史も同じでしょうが、新築には当時の医学水準、建築理念、時代的背景などの影響が伺われるものです。昭和二十二年の医専移転当時の手術棟は七五㎡で二手術室でしたが、耳鼻科と眼科には外来診療室に処置兼手術室があり、全身麻酔の要請がある板張の廊下を麻酔器を押して運び、手術が行われていました。これは独逸の影響を受けた分散型手術室の一形態と考えられます。翌年にはその東側に九五㎡の手術室が建築され、二台の手術台が置かれたましたが、空調設備もなく、清掃は床面に水を撒き、デッキブラシで行われていました。

昭和四十四年、中央診療棟完成を機に手術は手術部で行うことが決定され、正式に部として認可されました。建築様式は動線混合型中廊下型と総称される標準



写真1. 迅速凍結切片用画像装置

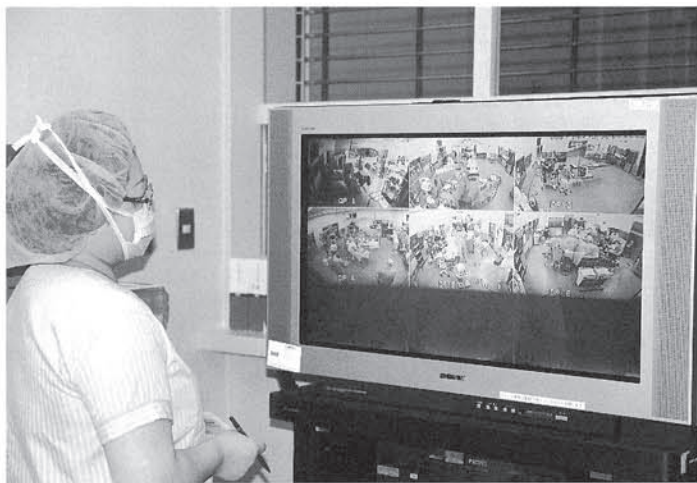


写真2. 手術室モニターシステム

的手術室で、当時の事務部長は将来病床に増床されても対応できる手術室数として、一室の面積を三〇㎡以上とし、空調設備や見学室、臨床講堂と結ぶTV送信装置などの設備に胸を張っていました。三室は床面が湿式であるなど古い因習の名残の強いことを感じさせました。移転後判明したことは、空調設備が単一ダクトで多室に送風する方式のため、相対的に送風量が少なく、温度管理が困難で、学生実習が開始され入室者の増加に伴い、手術室汚染は経年的に進行していった。補助暖房管やスプリンクラー設置工事、第一手術室の空調工事などでは壁面のコンクリート破砕にも悩まされました。各種医療機器やME機器の導入による電気容量の不足、手洗装置や医療ガスなど設備の老朽化による維持管理が

限界にきていた本年三月、次世紀を視野に入れた新手術棟が完成しました。設計理念は人と物の動線を一方通行とする動線分離型手術室で、平成以降新築された国公立大学病院手術部の設計図や設備図、発表文献を参考としましたが、根本的には旧手術部の二の舞を踏むまいという考えでした。評価は次代に委ねるとして、新設備の主なものを紹介致します。

一、手術室モニターリングシステム。その①は視聴覚システムの一環で、手術室内の映像情報（手術顕微鏡、術野、内視鏡など）を室外のゼミナール室に送信し、将来

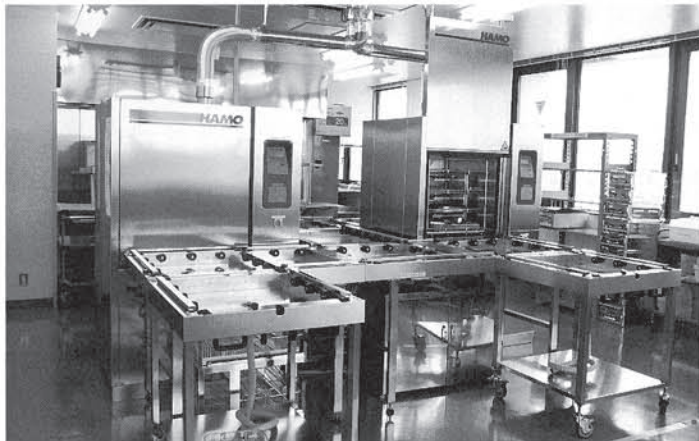


写真3. 手術器材自動洗浄装置



写真4. 手術器材自動保管庫

置により手術台稼働率向上に役立てるようにしたこと（写真2）。
二、手術器材回収洗浄組立滅菌保管システム。使用手術器材はユニバーサルブリコーションの概念に従い、自動洗浄装置で除染後（写真3）、組立室でセットの点検を受け、コンテナに収納して滅菌し、自動保管庫（写真4）に収納する一連の作業をシステム化した。従来看護婦が実施していた手術器械のセット化業務から開放し、本来の看護業務に専念させることを主眼にしています。



写真5. トランスマット患者移送ハッチウェイシステム



写真6. 手術室

三、手術台システム。病棟ストレッチャーで搬送された患者は乗換室の移動装置を介して分離式手術台に移されて手術室に運ばれ、術後も同装置を利用することで、移動に伴う人手と疼痛緩和を目的に導入されましたが、円滑に運用されていないのが現状です（写真5）。
四、その他（手洗装置、无影灯、医療ガス配管、高圧

V電源など）…手洗装置全体を無菌状態に保持することは難しく、旧手術部の貯水式装置の反省からフィルター濾過と紫外線照射流水方式としました。无影灯は天井吹出空調の性能維持と電球交換の不要な一灯式を採用しています（写真6）。医療ガスには空素配管を加

え、レーザー手術装置使用に備え各室に二〇〇V電源を組み込むなど設備の充実が図られています。空調の性能は温度管理や吹出風量が各室内で可能となり、塵埃数はクラス一〇〇となり、床面細菌数の大幅な減少など清浄度は飛躍的に向上しました。問題はこの設備を有効に活用することで、ドアの閉鎖や空いている手術室を通路替わりにしないよう心掛けるなど使用する一人一人の基本的な事項の励行が大切と思われます。動線の延長などハード面の変更は当面無理としてもソフト面でカバーが可能な点も多いと考えられます。建設的なご意見をいただき、より良い手術部にしたいと念願しております。

平成十二年二月一日付で本学医学部教授に就任した臨床薬理学講座立石智則教授と脳研・分子病態部門若林孝一教授の講演会が七月十九日に臨床大講義室で行われた。立石教授は「薬物動態と薬物代謝酵素」成長と加齢による変化、若林教授は「脳の老化と痴呆の病

術室を通路替わりにしないよう心掛けるなど使用する一人一人の基本的な事項の励行が大切と思われます。動線の延長などハード面の変更は当面無理としてもソフト面でカバーが可能な点も多いと考えられます。建設的なご意見をいただき、より良い手術部にしたいと念願しております。

臨床薬理学 立石教授
脳研・分子病態 若林教授

新任教授講演会開かれる

第二十六回国立大学動物実験施設協議会総会

協議会総会が開催される

附属動物実験施設長 神谷 晴夫

本年六月二日、第二十六回国立大学動物実験施設協議会総会が、四十六機関五十四施設から約一九〇名の参加者のもとに、シティー弘前ホテルで開催されました。文部省国際局学術情報課尾崎春樹課長、同出崎幸彦係長、遠藤正彦医学部長のご出席を頂きました。

前日、六月一日のサテライトシンポジウムでは、「二十一世紀に向けて加速する動物実験施設の組織改革」のテーマで、シンポジスト

夫々の大学での発展的生き残りや考慮した構想を基に、動物実験施設の将来像が討議されました。

また、翌二日午前中には、教官・事務官懇談会、技官懇談会が開催され、それぞれ、「情報公開法施行と動物

実験施設—特に動物実験計画書の開示について」と、「施設における技官の担っている役割」が討議されました。これらは、動物実験施設の学内センター化を視野に置いた施設の改組、それに情報公開の問題など、現在大学が直面する独立行政法人化、あるいは今後十分

にあり得るかもしれない大学、学部との統合に動物実験施設としてどのように対処する必要があるのか切実な問題を提起してありました。

さらに午後からの総会では、各ワーキンググループ(WG)の活動報告を基に審議されました。主だったものは、

(一) イヌ・ネコ・サルWG「動物実験用イヌ・ネコ・

サル」の導入等に関するガイドライン」の最終案が提示されました。あわせて、三重県、金沢大学、福井医科大学などで、イヌの自治体よりの譲渡が禁止、あるいは中止されたことが報告されました。また、五年後の「動物管理法」改正は、動物実験に対して更に厳しい内容となり、科学研究費の申請に際して、動物実験倫理委員会の当該動物実験計画書の承認書添付なども必要となる可能性が話されました。

(二) バイオセーフティー

委員会「感染動物実験における安全対策」の改正案が示されました。特に従来から問題のありました、感染因子の「安全度分類表」の見直しもなされ、現状にそぐわない点も、「運用にあたっては、各大学のバイオセーフティー委員会や動物実験施設関係者等の協議に委ねる」との一項がつけましたので、従来以上に柔軟な対処が可能となりました。

(三) 遺伝子操作動物対策WG…従来、各大学でその解釈に混乱のあった「動物実験における遺伝子操作動物の取扱に関する手引」が検討され、一部変更されました。その概要は、①ノックアウトマウスのような「安全性の高い動物」は供与に関する双方の承認は要らない。②しかし、それを受

領した人は実験を始めるにあたり、受領機関での機関承認が必要である。③一方、安全性の低い「動物」は、供与に関する双方の機関承認も、供与後に行う一般の実験についても、受領機関での機関承認をえなければならぬ、となりました。

世紀末の歴史的な今回の協議会総会主催にあたりましては、遠藤医学部長はじめ、事務方特に学務課の全面的な協力をいただき、お蔭様で、つづがなく総会を終ることが出来ました。皆様のご理解・ご協力に心から感謝申し上げます。参加者は、懇親会での津軽三味線、登山囃子、ネプタのお囃子の音色に、みちのく弘前の印象を深くし、余韻を持って帰って行かれました。

振興会課外活動助成金贈呈される

平成十一年度の鵬桜医学振興会の事業のひとつとして、学生の課外活動に対する助成(総額百万円)が行われることになり、応募のあった中から選ばれた部活動に対する贈呈式が七月十二日に医学部大会議室で行われた。

選考には学務委員会があったが、初回となる今回の助成対象として選ばれたのは、体育系五団体(バドミントン部、卓球部、バスケットボール部(男子・女子)、ゴルフ部、弓道部)、および文科系三団体(茶道部、保健医学研究会、漢方医学研究会)である。贈呈式に参加した各団体の代表には遠藤医学部長および鈴木唯学務委員長から祝辞をいただき、なごやかに授賞式が行われた。

(蔵田 記)



研究室紹介

法医学講座

教授 黒田 直人

基礎研究棟五階に法医学講座があります。現在の人員は四名プラス一名。講座主任の黒田、免疫学専門の北 武講師、組織学専門の三戸聖也助手(板柳出身)、大学院生の牧野容子さん。さらに、細胞自動解析装置室所属の對馬優子さんには、待機場所として法医学講座の一角を使ってもらっています。

現在私たちの教室にはいくつかの研究レパートリーがあります。諸体液のアルコール濃度分布パターンによる死者の飲酒後経過時間推定に関する研究、各種の血液蛋白を

指標としたSandwich-Dot ELISA法による血痕の人の鑑別に関する研究、皮膚の厚切り標本による皮膚変色の組織学的研究、衝撃性脳損傷における脳室壁の変化に関する研究等々。今のところいづれも少ない人数でコソコソと行っていますが、将来発展の期待される興味深い仕事をしております。

また、ユニークなプロジェクトとして、細菌学の佐々木甚一講師との共同による、キノコやニンニク、ワサビなどの諸種食物成分による抗菌・抗腫瘍作用に関する研究が北講師によって行われています。既に共存知かと思いますが、これは

地元密着型のプロジェクトとして注目を集めており、地元新聞紙上やテレビでもたびたび取り上げられています。

さて、法医学講座の主な仕事の一つに法医学解剖があります。私たちの教室では、ここ数年間、司法解剖・承諾解剖合わせて毎年百体以上のご遺体を取り扱っています。青森県の法医学解剖の特徴は、不幸なことに人知れず死亡し、時間が経ってから発見されたご遺体が多いことだと思えます。これらの方々のご遺体は、一様に腐敗や組織崩壊が高度であるため、ご遺体の顔貌だけでそれが誰であるかがわかりにくいのです。そこで、個人識別という作業が必要となります。

個人識別の作業では、血液型や歯科学的所見などが重要です。DNA多型によ

る個人識別も昨今よく用いられますが、行方不明者の生前のデータが既にわかっているという点では、ABO式血液型はより重要です。つまり、ご遺体のABO式血液型が何型であるかを特定出来れば、行方不明者リストから非該当者を即座に除外できるという、現在でも実務的に優れた情報源なのです。ただし、死後数ヶ月・数年を経過したご遺体からの血液型判定は、血球による直接的な検査が出来ないため、いろいろな技を要します。当教室第二世代教授赤石 英先生考案による典型的二重結合法や、解離法などの方法で行いますが、教科書通りにゆくような単純なものではなく、いつも苦勞の連続です。

ところで、亡くなって間もないご遺体も多いのですが、今述べたような死後変化の進んだご遺体を取り扱っているのも、基礎研究棟西側の老朽化した解剖室です。ご遺体に対して不謹慎かも知れませんが、そのような解剖の際に発生する臭気はたとえようもないほどです。しかし解剖中に換気しますと、一方は基礎の中庭へ、反対側では立ち並ぶ民家の方へ臭いが拡散してしまいうため、窓を閉め切った状態で解剖せざるを得ないのが現状です。辛い作業です。

しかし、ご遺体からの体液は高分子吸収ポリマーでその都度回収しています。また先頃は医学部の皆様にご心配を頂きましたが、ホルマリンなどは従来から弘前大学の廃液処理施設に処理をお願いしていますので、解剖室からの廃液に関しては万全です。ただ、中で働く教室員や立ち合いの警察官

や検察官などに対する感染防御勢が、今のままの解剖施設や人員では充分ではないというのが現在当講座の抱える大きな悩みです。

法医学は特殊な領域であるかのようにお考えの方も多いと思いますが、実は全ての医学領域と関連があり、決して医学の隅っこの方にある領域ではないと思います。法医学の研究テーマはだからこそ多彩であり、また医師として研究者として社会的責任を果たす場が法医学教室にはあるということが言えると思います。

これから進路を決めようとしている若い方々で法医学にも興味をお持ちの方は、どうか一度お気軽に教室までお越し下さい。お待ちしております。





研修最終日のプレゼンテーション後にThomas先生から記念品を受け取る岸さん（右）と小池さん（左）

血が多く衝撃的な幕開けでした。また出産に立ち会い、先生の言う通りに、赤ちゃんの頭を下に押したり、上に引つ張ったりしただけなのですが、実際に介助もしました。その際、タイミングや注意事項、出産後の処置等丁寧の説明を受けました。将来出産に立ち会わなければならぬ事態になったとき、この経験はきっと参考になると思います。

夏期国際交流報告
アメリカ空軍三沢基地での

医学部五年	岸 杏子
医学部六年	小池香菜子

七月三十一より八月十一日までの二週間、夏期国際交流としてアメリカ空軍三沢基地での病院研修を経験しました。

病院での研修は二週間分のプログラムがしっかりと組まれており、病院内の先生方に内容が知らされてあったため、私たちは不安に感じることもなく、充実した日々を送ることができました。プログラムの柱は、産婦人科見学、Advanced Cardiac Life Support (ACLS)の実習とプレゼンテーションの練習です。朝七時からだいたい四時くらいまで午前と午後に分かれて、それと確認します。しかも医者が一方的に情報を提供するのではなく、患者と話し合っているということが印象的でした。先生方は、時々私たちにも質問し、不十分な答えや、間違った答えををしても、とにかく誉めてくださいました。その上で、診察した患者の病態や考え方などについてわかりやすく説明してくださるので、より深い理解を得ることができました。

それぞれ担当の先生方について診療を見学するという形でした。空軍病院は入院患者は少なく、外来が主な仕事です。やはり一番に感じた

産婦人科で最初に見た手術は緊急の帝王切開術でしたが、もともとと手洗いをしているうちに残念ながら終わってしまいました。出

人科で最初に見た手
 急の帝王切開術でし
 もたもとと手洗いを
 るうちに残念ながら
 しまいました。出
 血が多く衝撃的な

他にも産婦人科の子宮摘出術、卵管結紮術、一般外科の単径ヘルニア、整形外科の腰椎ヘルニア切除術、新生児のcircumcision（割礼）等を見学することができました。どの手術でも解剖を質問されたり、説明していただいたりと、自分の医学英語の未熟さを感じました。

ACLSは、事前に宿題として教科書のコピーを渡され、実習は病院で三日間にわたって行われました。私たち二人に対し、先生一人という体制で、じっくりと各algorithmを説明していただく、ダミー人形での練習も何度も行ったのでとても分かりやすかったです。大学の授業では、このように除細動器の設定数値や使用薬剤の順番や投与量等を系統立てて習うことがなく、貴重な体験を得たと思います。

実際に空軍病院では、月に一回くらいダミー人形を廊下に置き、抜き打ちのテストをして、先生方が適切に対応できるかどうかを採点しているといっていました。

最終日には、ACLSの筆記試験を受け、どうにか合格したようです。

病院研修
メンフィス

医学部五年
堀内
智子

七月二十八日、泌尿器科
学の試験を終え、SGT資格試
験の前半戦を折り返し、弘
前出発。二十九日、メンフイ
ス到着。ジャニスさんの笑
顔に迎えられる。

最後の週末、友人たちとメ
ンフィスを訪れ、The MED
の辺りを撮影していたので
ある。

三十一日、目の前に現れ
たThe MEDは三年前とそ

三十日、**downton** に行くとバスに乗る。かなり離れたところでバスを降りた。私たちを助けてくれたのは、教会から帰る途中らしいの、老夫婦と息子さん。親切に、バスは本数が少ないからと赤いトラックの荷台に私たちを乗せ、**downton** に連れて行ってくれた。礼を述べ、手を振る私たちを残し、トラックはおばあさんのチャーミングな笑顔とともに走り去っていった。

姿を変えていなかった。The MED (MEDCOM; Medical Communications Center at The Regional Medical Center at Memphis) はテネシー州西部の救急医療を担当する公立病院で、ミシシッピ州北部アーカンソー州東部からもヘリコプターで患者は運ばれてくる。約五十五台の救急車と二十の病院が The MED の担当地域にある。

午前 Emergency Room (ER) を見学。内科を中心につ

ミシシッピ川を見た後、バスもないので歩いて帰った私は疲れていたが、緊張と期待で、なかなか寝付けなかった。メンフィスに行かれた仙田先輩や国際医療研究会のメンバーとともに留学生を案内しているうちにメンフィスでの病院実習に憧れた私は、バイトに励んで、二年の夏休みにテネシー州立大学マーチン校の語学研修センターに通った。そして、テネシーを離れる

外傷、熱傷を除くさまざまな患者がこのERを訪れる。患者の問診後、質問をしないうとヨルダン人のレジデントから矢継ぎ早に質問が飛ぶ。診察中も質問の嵐。例えば、五十二歳女性、四日前に家で右手掌をついて転倒、右手関節部の腫脹と疼痛を訴えて来院、どこの骨が折れたか？どのような所見が、それを示すか？この場合は、手関節背面が遠位骨片により膨隆し、フォーク状の変形

蔵田教授までも聞きに来てくださり、大変楽しい思い出になりました。ここでプレゼンテーションのトレーニングを受けることができ、大変よかったです。

二週間という短い間でしたが、米軍基地という特殊な環境での研修ができたことは大変幸運であったと思います。基地内といえどもみんな家族がいて、学校、

スーパー、レストランや映画館もあるので、アメリカの小さな町みたいなものだ」と先生方は言っており、空軍病院は大学病院とは違うアメリカの一般市中病院といった感じでした。

最後になりましたが、今回このような機会を大学が設けてくださり、協力してくださった先生方に感謝申し上げます。

形も見られ、定型のとう骨
下端骨折だったが、多科に
わたる質問の中には、病院
実習前の私には少々難しい
問題も多く、文字どおり閉
口してしまった。

午後、Burn Centerを見学
テネシー州立大学の皮膚科
が担当しているこの施設に
は、熱傷専門の施設はアメ
リカでも珍しいため、南部
の多くの州から重症の広範
囲熱傷患者が運ばれてくる。
処置室と病室を見学した。

いった一連の流れを聞いてから、一時間もたないうちに交通事故などの多くの患者が運ばれてきた。そして十時ころ、**“Trauma admission by air 10 minutes”**と緊急の患者が来るアナウンス。何度ここで聞かれたかわからないhospital wingへの到着の知らせだ。このとき運ばれてき



右から派遣学生の堀内さん、境君

夕方からTrauma Centerで実習。このElvis Presley Memorial Trauma Centerに来る約半分の患者は治療費が払えないが、エルビス・プレスリーとその多くのファンクラブの寄付によって支えら

た八十一歳のおばあさんは、意識があり、うめき声を挙げていた。二ヶ月前に冠動脈バイパスの手術をしたばかりなのに、かれたらしい。午前

れており、年間の患者数では、全米で最も忙しい。Trauma Centerの三指にはいる。医師、レジデント、医学科四年生は二十四時間勤務と休みの繰り返しで、土日はない。三年の医学生が夕方の六時から翌朝の五時まで日替わりでやってくる。

ごろ、銃創の手術の
終え、患者を病室に
わってほつと一息つ
そのおばあさんの病
がしくなってきた。
射器のケースを何本
看護婦に渡した。し
着マッサージが始ま
細動の甲斐もなく家

実習の厳しさから医学生の中には抗不安薬を飲むものもいるという。ナースは男女半々の割合で三交代制、診察から処置まで手術室で手術をしないことを除けば重症なら医師といった役割分担ぐらいしか見られなかった。(医師同士は朝七

着もまたずにあつて、
 泣いてしまつた。
 の患者の死に立会い
 のいい看護婦さんが
 くれた。控え室では
 が今の気持ち忘れ
 うにと輸してくれた
 六時、境さんととも

時、申し送りをしてから交代するがナース同士や全体でのミーティングは見られなかった。ただ、朝の交代の頃はベッドに囲まれるデスクの周りで冗談を言い合っており、皆仲が良かった。

を受けながら患者の二針ほど縫ったあと七時やつと長かった。終わった。

患者が引つ切り無れるTrauma Centerでように毎日があつとに過ぎ去った。最終

医学生から患者が緊急できた場合の学生がやるべき尿力テ等の処置や採血、心電図、頸部、胸部、腹部のX線単純写真、CT、MRIと

日には患者の少ない隣りの病院で経膈分娩切開、新生児センター学させてもらい、午時過ぎにTrauma Cen

平に引
二時半
光学を
延び終
た頃、
主が騒
私も注
開け、
し、心
、除
の到
はよく
初めて
思わず
恰幅
忠めて
境さん
ないよ
午前
指導
語を十
午前
日
この訪
この間
うの八
とき、
帝王
を見
十一
の皆

さんに別れを告げ宿舎
戻った。

翌日八月九日からの三
間は精神科で午前は小児
み、午後は親子でカウ
リングを主に見学し、夜
は救急医療を見学した。
た、十一日には、私立病
の循環器と泌尿器の病棟
見学できた。

十二日朝にメンフィス
ジャニスさんに見送られ
発。十七日から始まる試
の後半戦に不安を抱きつ
十三日夕方帰国。受け入
先の先生方はじめ事務局
方々、学生の皆さん、華
先生、そして一緒にいか
た境さんのおかげで、私
二週間の実習を本当に充
したものとすることができ
ました。このメンフィス
の実習はきっと私の中で
つの指標として生き続け
と思っています。この経験
をSCTも有意義なものに
ていきたいです。

*この実習のため東医
に参加できなかったことに
り、ご迷惑をおかけした
ドミントン部の責任学年
皆さんに深くお詫び申し
げます。



外部評価への対応

4つの専門委員会の設置 具体的な対応策の検討

既に本紙に掲載されたように、当医学部・附属病院はそれまでの改革の進捗状況について外部評価を受け、その結果については昨年十一月に「外部評価報告書」として公表した。この中で、外部評価委員会から指摘された点について早速に対応すべく、遠藤正彦医学部長をはじめ原田征行附属病院院長、泉井亮医学部二十一世紀構想検討委員長、神谷晴夫学務主任・学事委員長、鈴木唯司入試専門委員長、佐々木睦男医学部・附属病院自己評価委員長の名からなる外部評価具体化委員会が組織された。その結果、医学部の全教授が参加して、

二十一世紀構想検討委員会を除く四つの専門委員会を組織し、具体的な提言を策定することになった。また、診療に關しては既に附属病院で作成された「近未来における改革・改善計画」に委ねられた。

その専門委員会は(一)学部教育専門委員会(正村委員長、中根、水島、中澤、保嶋、木村各教授)、(二)入試・教育評価専門委員会(松木委員長、三田、澤田、佐藤、松永、棟方(博)各教授)、(三)研究・大学院専門委員会(佐々木委員長、加地、蔵田、土田、神谷、黒田、須田、鈴木(唯)、阿部、斎藤、菅原和信各教授)、(四)地域医

療専門委員会(棟方(昭)委員長、工藤、菅原和夫、鈴木(宗)、鈴木(重)、羽田各教授)で構成され、これまでの改革のさらなる進歩、発展を目指す具体的な対応策について検討した。その結果は近く公表される予定であるが、本紙ではこれらの内容の概略につき、各専門委員会委員長に寄稿を依頼した。その一部については既に実行されているが、その他の事項についても教職員の理解と協力によりその実現に努め、当医学部・附属病院さらには地域医療のレベルアップに向かって努力する必要がある。

(佐々木 記)

地域医療専門委員会

兼業での二律背反のジレンマ

委員長 棟方 昭博
(内科学第一講座教授)

昨年度実施された外部評価への具体的対応のため「地域医療専門委員会」が設置され、医師不足の青森県にあって、医療需要と兼業の関係改善や医師の供給等が検討された。

外部評価報告により指摘された事項は「兼業数の制限は絶対必要である。兼業のため本業がおろそかになるのでは、大学本来の姿を著しく損なうことになる。地域医療と大学病院の関係については抜本的に解決すべきである」に集約される。本委員会では、学外での兼業の多い理由、兼業の必要性、地域の特長性、兼業を少なくするための対策、大学院生の兼業の問題、医師

派遣のシステム等を検討した。歴史的背景から青森県を中心に道南、北東北に広い範囲での医師の供給が求められており、医療の高度化、大病院志向の患者の流れなど多様化する医療に共い一線医療での従前以上の医師の増員が求められ、医師供給源としての当学部への要望が大きくなっている。又最近社会的話題となった所謂「標欠」問題では、青森県知事が弘前大学長に更なる医師の供給を要請するなどの社会的ニーズと、今回の外部評価による兼業の規制との二律背反のジレンマに本委員会は陥った。兼業の理由や地域の特長性、医師派遣システムの必要性な

ど各料の実情を知る目的でアンケートを行った。

教官の兼業に關しては、当医学部では国家公務員法第一〇四条及び教育公務員特例法第二十一条に基づき、全教官に兼業等の基準(兼業手続等)に関する手引き(平成九年八月)の小冊子を配布し、更に毎年個々の兼業届を医学部兼業審査委員会に於て審査し、兼業の妥当性を検討しており、教官の兼業の違法性はない。教官の兼業は地域病院の若手医師の指導のため社会的ニーズから欠かせない現況がアンケートより理解された。しかし素より、教官の本来的な教育・研究・診療に専念すべきであり、地域医療の充実を図り、次第に兼業を最小限とすべきである。具体的方針としては、各科の特殊事情を勘案すると一律な制限は困難であり、各教官の定期的な兼業の自主的な抑制に期待したい。

医員・大学院生の関連病院への派遣に關しては、北海道・北東北の自治体病院

の医師充足度は低く、さらに青森県における医師充足率は八五・七%と、東北・北海道地区では最下位である現状から検討された。自治体病院の常勤医は、医学部より出向している約二〇〇名の医師を含めても一五五名不足した状態で病院が運営されている。仮に外部評価に従い医員・大学院生の関連病院への派遣を中止すると、青森県の医療が潰れることは明らかである。一方、医員や大学院生の最低限の生活保障は当然必要であり、問題はそのバランスを教室のスタッフがいかんにかコントロールするかである。これらの問題を解決するには勤務医の増加と効率よい配置が望まれ、自治体病院再編成検討委員会が県の指導の下に開催された。自治体病院での量的整備は進んだが、各病院間の機能分担・連携を図り、限られた医療資源の有効活用が求められている。再編成検討委員会は自治体病院間の機能分担・連携により、機能

昨平成十一年に当学部と附属病院は、外部評価を受け、十月にはその評価結果が報告された。これを承けて、遠藤学部長は直ちに評価で指摘された事項を改善するため、「改善具体化委員会」を設置したが、入試・教育評価に關しては、佐藤敬、澤田幸正、松永宗雄、三田禮造、棟方博文、松木明知の各教授が指名され、私が委員長に選出された。

昨年十二月に委員会が発足以来、紙上も含めて十数回の委員会を開催した。委員では、各委員から外国の文献も含め膨大な資料が提出され、種々討議がなされたが、こと入試や教育のことであるだけに、議論は弾むものの「これぞ探し求めた宝」という結論は仲々の入試が開始されて以来の入学者の教養時の成績、基礎、臨床の成績など、一人一人検討したが、必ずしも一定の傾向は見られなかった。佐藤教授からは別に過去に十年間進行した詳細な統計が提出され検討された。その結果、今年六月に次の

効率化を図る方向性で、平成十一年九月に指針が示された。平成十二年度は指針に基づき、各地域での具体化が検討されている。この実行により、外部評価指摘事項に一部答えられるものと期待する。

地域医療に關する外部評価

に対する具体化は上述の如く大学側のみで方向性を決定できない要素も多く、更に外部評価指摘事項を単純に実行した際の医学部への大きな社会的非難が予想され、中・長期的展望の改革が必要である。

入試・教育評価専門委員会

人間を評価する難しさ

委員長 松木 明知
(麻酔科学講座教授)

四項を結論として教授会に答申した。

一、入試時の面接に關して、この任に当たる教授、助教は、面接の技法に更に習熟する必要がある。このためセミナーなどの開催が望まれる。

二、現今のカリキュラムは過密であり、却って学生の学習意欲を減じていると思われる。医学概論、医学英語、研究室研修を含めて、根本的見直しと講義時間の削減が急務である。

三、教員の資質向上のため、現在二日間の講習会が設けられているが、教育法などさらに研究を充実すべきである。

四、講義、実習の質的向上を企てるため、学生によるアンケートをもっと頻繁に行う必要がある。

この委員会を通じて、教官と学生が共に「教育」の大切さをもっと意識すべきであることを痛感させられた。

研究・大学院専門委員会

研究活動活性化のためのソフトとハード

委員長 佐々木睦男
(外科学第二講座教授)

研究・大学院専門委員会は外部評価委員会から指摘された事項に対応する目的で十一名で組織された。その改善を求められた点は、(一)大学院の活性化、充足率の向上、(二)研究活動の活性化、英文論文数の増加、(三)特色ある研究の推進、等に集約される。当委員会は平成十一年十二月二十八日から八回にわたり、これらの点について検討し、次の五項目を本委員会からの提案事項として提言すること意見の一致をみた。

一、大学院の定員枠の改革——大学院生の講座・部門別の定員を新卒・既卒の枠を廃止し、各学年四名までとする。ただし、社会人、修士課程修了者枠はこれまでと同じく講座・部門毎一名とする。また、入学試験をSOS終了後とこれまでの二月の二回とする。

二、大学院制度の充実——大学院における研究業績は大学院生によるところが大きく、定員の充足率の向上とともに、卒業後臨床研修の義務化に向け、大学院生が行っている現行の兼業や臨床研修法の見直し。

三、共同研究の推進——講座間を含め、国内外の他研究機関と積極的な情報交換および共同研究を行う。複数の講座・部門が横断的に一つのテーマを設定し、共同研究形式で大学院生を募集する。また、地域と密着し

た研究を促進するため、県内各機関との情報交換を積極的に行う。

四、中央機器センターの整備——現行の基礎系中心に設置している「共通機器センター」と、臨床系中心に設置している「臨床中央研究室(臨床研究棟再開発後は臨床研究センター(仮称)に改変予定)」とを「中央機器センター(仮称)」として再編・整備する。その効果的運用のためには専任の人的配置を行う。

五、優秀な人材(教官)の選考——魅力ある大学づくりには、教授を含めて優秀な教官の選考が重要である。また、大学に卒業生を少しでも多く残すためには、各講座・部門の研究内容を学生に広く知ってもらうよう努めることが重要である。

外部評価委員会からの指摘事項は以上の五項目のみで完全に対応出来るものではなく、その実現には各教官自らが指摘事項の内容を十分認識し、大学人としての責務を遂行することが重要である。その他、業績の一層の向上のためには、研究のしやすい環境づくり、講座・部門の研究を特定の分野に限って横断的に体系化するなど、集中的取り組みが必要である。いずれにせよ、現状を認識し、改革に取り組むことが最も重要である。

学部教育専門委員会

外部評価における

提言の具体化

委員長 正村 和彦

(解剖学第一講座教授)

平成十一年度弘前大学医学部・附属病院 外部評価報告書に述べられている提言を具体化するため、外部評価委員会が作られました。学部教育に関しては、具体化委員会の中の学部教育専門委員会(教授会で選出された六名の教授で構成、委員長 正村和彦)で提言の具体化の方策を検討しました。外部評価において示された提言・問題点およびこれを具体化する学部教育専門委員会の考え(教授会で報告済み)を以下に示します。医学部学生を含む当医学部の関係者の方々の御意見をいただきたく、お願いいたします。御意見は委員長(正村和彦、医学部解剖学第一)にお寄せ下さい。

総論的提言と

具体化案

一、Medical School 構想に向けて一本立てのカリキュラムを構築することが望ましい。これはほぼ完成されている。

二、講義の「コマ」の時間(九十分)は長すぎ、授業カリキュラムは過密すぎるので改善の必要がある。

具体化案—「コマ」の時間は従来通り九十分とし、六十分間授業をして残りの三十分を討議または発表またはCase Study等を行う。また、一日の講義は最大四コマにおさえるのが適当と思われる。

三、講義中心の教育から実習・演習中心の教育への転換が必要と思われる。

具体化案—演習は上述のように九十分授業の三十分を利用すれば可能と思われる。実習中心教育に関しては、各講座・部門の少ないスタッフによる実行はなかなか困難と思われるが工夫によっては可能と思われる。例えば、従来の実習と同じスタイルの実習を増やさなくとも、全ての教官が少人数の学生を日常の研究・教育・診療の中で実地教育することも可能と思われる。これによって、問題解決型教育、小グループ教育が医学教育の広い領域で具体化できると思われる。全ての教官が少人数の学生の実地教育に携わることが教官にとっても刺激となり、大学の活性化にもなると思われる。

四、医学専門科目の基礎医学科目、臨床医学科目、臨床実習の開始時期が他大学と比べて一年遅いので検討すべきである。

具体化案—現在、SCTの開始時期が従来よりも早められていて提言の具体化に沿っている。基礎医学の開始時期に関しては、共通教育との兼ね合いもあって、現在よりも開始時期を前進させることは困難と思われる。Medical School 構想に向けて一本立てのカリキュラムを構築する上で、現在の開始時期を前進させないほ

うが困難が少ないと判断される。

五、教育評価を行い、この結果をPositiveな方向に利用する。優れた教育内容の評価、適切な指導・助言が必要と思われる。

具体化案—学生による教育評価は行っているが、これは現在断片的であり改良する必要があると思われる。また、授業シラバスも教育評価の対象となるが、これの充実・改善が必要と思われる。同僚による教育に対する助言を行ってはどうか?さらに、Faculty Developmentを充実させ、教育法の改善を研究・研修するの

各論的提言と

具体化案

一、基礎ゼミナールでは到達目標の設定が望ましい。テーマがばらばらであることも改善の余地があると思われる。

具体化案—テーマがばらばらであると言う事は、多様性があり、担当教官の工夫の可能性がある事を意味すると考える。このことは悪い事ではない。基礎ゼミナールは知識や技術の教授が目的ではないので、到達目標の設定は容易ではないと判断される。提言に少しでも近づいた場合には、Key Wordsをいくつか設定して、これを使ってゼミナールを行う、さらに目標設定として、ゼミナールの内容に関するエッセーを書かせることも有意義であると思われる。また、基礎ゼミナールをホームルームの様なものと理解し、一年だけでなく六年間を通して小人数の学生の担当制を行ってはどうか。

二、医学概論に他学部の教官の参加が望ましい。これは実行されている。

三、担当講座間の講義内容の有機的関連を計ることが望まれる。解剖学/生理学、病理学/臨床医学など。

具体化案—当該講座間で弾力的に解決することが可能と思われる。病理学/臨床医学では、臨床、画像診断、臨床検査、病理さらに病態生理を含めた新しいCPCなどの企画の試みを提案したい。

四、研究室研修では到達目標、行動目標を定め、その成果の発表の機会を設けることが望ましい。

具体化案—この提案の実行は有意義であると思われる。発表はパネルを使用すれば、時間の節約ができ、低学年の学生もこれらを見て、自分たちが研究室研修で何

は実行されている。

五、基礎から臨床への移行期に総合医学(仮称)の授業科目を設定して、患者への接し方、問診、身体所見の取り方などの教育の充実が望まれる。また、これらの初期臨床技能の時間が短い。

具体化案—この提言は現在実行されている。さらなる充実が期待される。

六、臨床医学各教科での実習時間の割合の再検討が必要と思われる。

具体化案—臨床の各講座間で検討し実行することが望まれる。

七、クリニカルクラークシップの導入が遅れている。

具体化案—これは学生を診療スタッフの一員として扱い、実地研修させる教育である。これを安全かつ有

意義な教育法とするためには、スーパーバイザーとしての資格を持ったスタッフ

が要求される。臨床実習で何をどこまで実習させるのか医学部で明確な設定をする必要がある。病院長を中心に検討されたい。また、倫理委員会も実習内容を検討し、実習内容を公開しなければならぬと思われる。

現在SCTで実習している学生は医師と同じスタイルをしているが、これも一目で区別できるようなものにする必要がある。実行に当たっては患者の了解も得なければならぬ。

八、臨床医学の臓器別系統講義の内容の統一性の改善が望まれる。

具体化案—基礎医学科目に場合と同様に臨床講座で

検討し実行することが望まれる。

九、関連病院、海外の姉妹校(テネシー大学、国立極東総合医科大学)、三沢米軍病院など、学外での実習をさらに充実することが望まれる。

具体化案—これには多額の資金が必要であり、本学の教育の目的・特徴などを父兄に明確に説明して入学時の財団への寄付金を増額などする必要がある。本学では、これまで入学時に父兄への説明などが行われていない。今後は私立大学と同様に父兄に本学の教育理念・目標などを説明し、協力・支持を求める必要があると思われる。国内での関連病院での臨床実習はさらに広範囲に、現在行ってい

る病院以外に広げることの検討が必要と思われる。おわりに—論文を投稿する。レフェリーからコメントが付いて論文が戻ってくる。著者はコメントを検討して論文の改善を試みる。レフェリーは著者と実力が格段に違うわけではない。そのため、コメントの全てが納得できるわけではない。しかし著者が気づかなかった重大な誤りや有意義な指摘も多い。この外部評価も同じである。評価はその時代の色で塗られている。指摘された改善すべき事項を十分に吟味・実行し、二十一世紀の弘前大学医学部の自由で独自の道を開く試みが本学のすべての人に望まれると思う。

専門家帰国報告会

— ジャマイカ南部地域保健強化プロジェクト —

公衆衛生学講座教授 三田 禮造

ジャマイカ南部地域保健強化プロジェクトは本年度で三年が経過することになります。派遣された長期、短期の専門家は現在までに既に十一名となっておりま

す。

五月二十二日青森県の協力により派遣されていた館田有佳子保健婦の帰国に合せ、短期専門家として本年二・四月にかけて派遣された、放射線医学講座松谷英哉助手及び医療技術短期大学部山田智恵里教授の三名による報告会が開催されました。

館田保健婦は平成十年十月から十二年四月まで健康

教育担当として滞在しました。健康教育は本projectの重点目標であり、健康教育システムの評価、wellness clinic & mobile clinicの立ち上げ、生活習慣病に関わる健康教育の媒体作成の指導等を行いました。また中堅

地域のボランティア等の人

今回の報告会はこれまでの成果に対する評価と今後の活動への示唆に富んだ提言がなされ、projectに関係する者にとり反省の機会を得ることが出来有意義でした。

これらのProjectとして活動のモニタリング・評価に対する具体的目標の設定に問題点があることを指摘しています。また健康教育が活動のProjectの核であるとの認識の下に、健康教育用教材の開発、教育用視聴覚教材の供与と共に、ジャマイカ側担当者の能力向上訓練と実地指導や



報告講演中の三田教授

第三年次学士編入学制度導入に向けて

群馬大学医学部の視察報告

泉井 亮(生理学第一講座)

「いやー、今は本当に、やってよかったと思つていますよ。」

これは、群馬大学医学部の鈴木学部長に、学士編入学(十五名)を導入してから三年経過した現在のお気持ちを伺ったときのお答えである。発足当初まで、実は、鈴木学部長は学士編入学に対してやや消極的な態度をとっておられた。何かが、学部長のお気持ちをこのように変えたか、諸先生方からお話を伺ったり、学生と懇談しているうちに、納得できた。

本学では、平成十三年年度概算要求に第三年次学士編入学制度導入に関わる入学定員の減員(二十名)を盛り込むべく準備が進められている(ただし、編入学生二十名の受け入れは平成十五年度から)。これを文部省に説明に行った際、本学が計画している二十名の編入学を成功させるためには教育カリキュラムの充実が重要であること、先発大学を視察し今後の参考にすべきであること、等の指摘があった。

そこで、学務委員会、学部評価具体化教育委員会、二十一年次構想検討委員会からの委員、総計九名で構成するカリキュラム作成プロジェクトチームを発足させて、第一次案として二十一年次構想検討委員会が教授会に提案し、先に文部省に提示したカリキュラム(案)の見直しと、すでに十五名の学士編入学を実施している群馬大学医学部を視察することになった。

視察日、五月三十一日。視察メンバーは、元村(薬理学)、泉井、奥村(内科学第二)、木村(歯科口腔外科学)の各教授と事務から佐々木学務課課長補佐、村市管理課司計係長の計六名。群馬大学医学部からは、鈴木学部長をはじめ、前医学部長の石川教授、小浜教授(薬理学)、小宮教授(前医学部入学試験委員長)、中島教授(学務委員長)が応対してくださった。十時から午後三時までずっと一緒に話をしながら、内部資料まで提供して戴くほど詳細にお話を伺うことができた。このように丁寧な取り組みを戴いたのは、遠藤医学部長より依頼してあったことはもとより、元村教授が親しい小浜教授にご便宜をお願いしていたことによるところが大きい。ちなみに、学士編入学に関して群馬大学医学部を視察したのは、今回がはじめてのケースのこと。先生方の気合いの入れようも格別で、視察は本学の学士編入学導入に向けて非常に参考になった。

食時には学士編入した学生(現在三、五年生)にも加わってもらい、生の声を聞く機会も設定されていた。群馬大学医学部の学士編入学制度導入に至る経緯としては、まず、入学する学生に均一化が目立ち、多様化に対応するには新たな母集団から選抜する必要があること、明確な目的意識に欠ける学生が少なくないこと等、本学の本制度導入の目的と一致する背景がある。しかし、群馬大学医学部では、研究指向の人材の減少に対処することを本制度導入の目的の一つとしており、編入学する学士学生がその方向に進むこと、また彼等によって通常入学学生が刺激されることで、積極的に学ぶという習慣を見付けさせたいとしている点で本学とはやや異なっている。本学は、生き残りをかけた大学の活性化と、その結果としてもたらされるであろう地域医療の充実のためにMedical School構想を掲げており、その準備段階として、本制度を導入しようとしている。勿論、本制度の導入自体が、大学の活性化、社会の求める良医の育成につながるものと期待していることは言うまでもない。この一部目的の違いは、両大学の現状、大学を取り巻く環境の違いに起因するところは明白である。群馬大学医学部では、本学が抱える卒業生の大学への定着率の低下、周辺地域の医師不足という深刻な問題は生じていない。

しかし、本制度導入にあたっては、必ずしも順調に経緯したわけではないようである。若い能力に対する制限、カリキュラム設定のむずかしさ、十五名の学士が、短時間(四年間)で医学を習得し、卒業後もリイグラーの立場で活躍できるかどうか、といった、本学で議論されたと同じ問題や不安が本制度の導入にブレーキをかけた。「最後は見切り発車のように進んでしまっただ」とは、本制度導入時の医学部長(石川教授)の言葉であった。

群馬大学では十五名の学士を第三年次に編入させるに当たって、カリキュラムを大幅に変更した。新しいカリキュラムの基本は、講義時間の減少、実習の充実、臨床教育の充実、編入生に対する高度教養科目や研究カリキュラムの実施等であり、本学が作成しつつある新しいカリキュラムのそれと一部共通している。編入生にとつては、基礎医学教育のいくつかの項目を履修しないので進級する、あるいは薬理の後に生理を学ぶといったような履修の順番などにも問題はあろう。編入学生の加わったクラスでは、適当に編入生が混じったグループがいくつか形成され、彼等がリーダー的存在になつていく。彼等に引っぱられて、通常入学の学生達にも積極性が出てきている。教官よりも詳しく知っている学生もいて、彼等に説明してもらおうとだつてある。教官もおちおちしてはいられない。等々。この点では、本制度によつて、積極的に学ぶ姿勢を学生に身に付けさせたいという大学側の目論見は完

オタゴ大学 副学長訪問



会談後のスミス副学長と遠藤医学部長

全に当たつたと言える。このような学部教育の活性化は、研究や診療など、大学の他の活動にも影響ははじめているとのこと、「やって良かった」となるはずである。昼食を一緒に取りながら会談してくれた学生達は、特にそういう学生を集めたのではないかと疑いたくない程に、全員積極的に快活、医学を学ぶ喜びに溢れていた。いかに、大学時代に医学の道に進みたいと思うようになったかを、熱っぽく語ってくれた。勉強についていくのが大変だ、通常入学学生との間に溝がないとは言えない、など、心配な部分もあるようではあるが、なんとか前向きにやっているようである。「我々のような学生をたくさんとって下さい。カリキュラムに少々問題があっても大丈夫です。」

自分達で解決していきます。我々にはその気力と能力がありますから。」何とも、頼もしいかぎりであった。本学が生き残るためには、教育・研究・診療それぞれにおいて、これまで以上に活性化し、社会にとってなくてはならない大学になることが必須である。それを、地域の人達も、卒業生も、期待している。そのために、教官をはじめ本学の全構成員に、これまで以上の努力が求められることは当然である。本学の学士編入学制度導入が大学活性化への新たな刺激となり、教育の質も向上していくに違いない。弘前はいい教育をやっていると聞かれる日が、きっと来る。そんな気持ちの高まりを覚えながら帰路についた。

ニュージーランド南部、オタゴ県の中心都市であるデュネーディン市にあるオタゴ大学からスミス副学長が本学を公式訪問し、七月十二日に医学部を視察するとともに遠藤医学部長および国際交流委員会と会談した。これはオタゴ大学と本学との国際交流協定締結が本年度内にも予定されており、特に医学部が協定の中心的役割を果たすと思われることから、この機会にスミス副学長が訪問されたものである。折しも図書館医学分館では松木教授所蔵の特別展示会「ノーベル医学・生理学賞に見る西洋医学の系譜」が開かれており、神経生理学のエックルス博士などニュージーランドにゆかりのノーベル賞受賞者が二名いるとのこと、大変喜んでおられた。オタゴ大学は商学部、医学部、人文学部と理学部の四つの学部とそれぞれの大学を有する総合大学であり、ニュージーランド最古の大学として一八六九年に創設された。学生数は一万七千人に達し、教育・研究の両面で高い評価を得ている。

医学部は医学養成の医学科のほか、歯学、薬学、理学療法学、生命科学などの学科を有し、デュネーディンのほか、ニュージーランドの主要都市であるクライストチャーチとウェリントンにもキャンパスを持つている。遺伝子、神経科学、免疫、がん、循環器、内分泌、呼吸器やフリーラジカルの分野で優れた研究業績を挙げ、ニュージーランドの医学研究費を最も多く獲得している大学である。また、オタゴ大学は国際部門を設置して、国際交流に熱心に取り組んでおり、米国のカリフォルニア大学、スウェーデンのウプサラ大学、東京大学など世界中の多くの大学と交流協定を締結し、二〇〇〇年にはすでに五十五ヶ国から合計九百四十六名(日本からは三十九名)の留学生を受け入れている。デュネーディン市はオタゴ大学を中心とした教育都市で治安も良く、整備された環境で生活できるので、今後の本学との国際交流の発展が期待される。(蔵田 記)

コラム 医学部 こぼれ話

●あまりにも真面目すぎるA教授の講義には、学生が寄りつかない。ある日、たった一人だけ出席した学生のために、授業時間を更に十分間も延長して講義をしたという。このような教授は、もういない。

●ある教授、講義のため講義室に入ったら、学生が十数名しか出席していない。

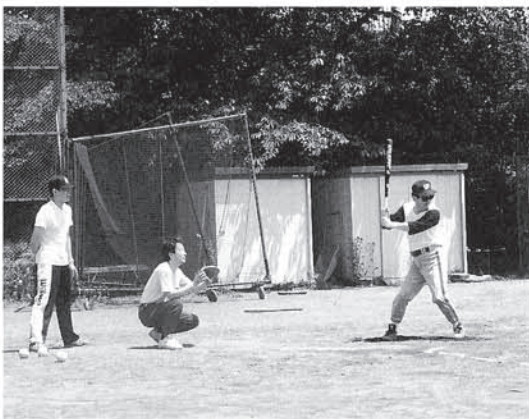
怒った教授、説教を始めて授業時間の半分も過ぎた。我に返った教授、気がついて「出席している人に、欠席した人の文句を言ってもしょうがない。今日出席した人の試験は悪いようにしないから。」と言った。後日の試験ではこの日の出席者の大半が不合格だった。

六階連合 二年連続優勝を果たす

基礎ソフトボール大会

白球が空に舞い、六階連合が劇的な逆転サヨナラ勝ちで細菌・法医学合同を下し六階全勝で二年連続優勝を遂げた。

六月五日に開幕した第二十一回学部長杯争奪基礎教職員・学生ソフトボール大会は初戦から白熱した試合展開となり、脳研と基礎事務連合は両者譲らず七対七で引き分けた。優勝候補の第一生化学は持ち前の強打で開幕から四連勝と順調に勝ち進んだが、細菌・法医学合同に十対十一で破れた一敗が最後まで尾を引き、遠藤監督の激励も届かず六階連合との直接対決にも破れ四勝二



バッター 元村教授、キャッチャー 中根教授

敗で準優勝に終わった。一方、細菌・法医学合同は接戦を物にする勝負強さで四勝二敗と健闘、第三位に食い込んだ(第二位、第三位は得失点差による)。二病理・二生化合同は上位二チームの壁が破れず三勝二敗一引分で四位。昨年最下位の脳研は昨年からの連敗を七でストップし一勝三敗二引分で五位に躍進。基礎事務連合は連戦の疲れから一勝四敗一引分で六位。

東医体速報

今年も団体、個人戦に活躍!!

ラグビー部……二年連続優勝
準硬式野球部……優勝

女子バレー部……全医体準優勝
卓球部……個人ダブルス優勝
空手道部……個人三位

今年度の東医体でも弘前大学は前年に引き続き優秀な成績を挙げた。

七月下旬に始まった第四十三回東医体夏期大会では各地で熱戦が展開され、ラグビー部が強豪自治医大(三年前まで十三年連続優勝)と決勝で同点、両校優勝にて二年連続四度目の栄冠に輝いた。準硬式野球部は昨年は惜しくも三位であったが今年は見事優勝、さらに全医体も制した。女子バレー部は初出場ながらベスト8に入賞。さらに予選で優勝校に勝っていたため全医体にも出場し見事準

図書館だより

廃棄雑誌があるときは まず図書館へ連絡を!

現在、医学図書館は問題山積の有様です。その第一は、図書館の生命とも言える雑誌の購入価格の高騰で、購入雑誌の削減に追い込まれていることです。特に、外国雑誌は年十パーセントは確実に値上がりすることが続いています。ヨーロッパの某大手出版社は為替レートも無視し、一方的な設定をしています。今日にはじまったことではありませんが、いち図書館のみでは解決不可能です。ですから、どこの図書館でも雑誌削減に追いやられています。本医学図書館に於いても同様です。削減に削減を重ねてきました。購入を、

講座・部門に付託までして

図書館二階に設けられた展示室入り口左手の壁面に掲げられている油彩だ。渓流を覆うような木々の緑のやわらかさは春、それも間もなく夏近しの感。如何でしょう、そう、ご覧になりませんか。過日の大規模な山崩れで、多分、この絵に留める奥入瀬渓流をみることはもう出来ないかも知れない。渓流とはいって、この絵の流れは実に優しい。

診断に悩み、図書館に足を運び、この絵をしばらくながめてみると、ふっと、この絵の世界に運ばれ、想いを新たにしたい。図書を訪れる学生・教職員の心の「ふくらみ」の一助になることを願う。協力をお願いしたい。ご連絡ください。すよう。 (図・鹿藤)

サークル紹介

水泳部

医学部水泳部といえども、私たちは全学と一緒に活動をしています。ついにシィ

ズンとむかえ、学園町の五〇mプールが使えるようになります。毎日泳いで練習をしています。これから夏に向けて大会も多くあるので、九つのコースに泳力別におのおの分かれ、その泳力に合った効率のよい練習を行っています。



それぞれ一心不乱に泳ぎこみ、まずは体力をつけま。お互いに泳ぎを見て泳ぎ方について指摘し合い、より美しい泳ぎを目指します。時にはライバルとして



息継ぎのしかたなどを学び、着々と泳げる距離をのばしていています。いま、私たちは旬の時期によい環境のなかで泳ぐことができてとても幸せです。水泳部バンザイ!

図書館絵画案内(7)

「奥入瀬渓流」

朝倉 滋

朝倉先生は本学一期生。外科医である。青森市医師会長もされた。そして、絵の筆を「執る」だけではなく、俳人でもある。NHKの俳句講座でお名前をみた記憶があるし、この絵と一緒に贈られた自作絵画案内「花簪(はなかんざし)」では俳句で絵の+aを伝えている。平成十一年春、乞うて、頂戴したものである。

医学部図書館では卒業生をはじめ、人生のある時期、この医学部に何らかの関わりを持った方々の絵を求めている。図書館を

弘前国際医学フォーラム 第4回学術集会 「糖鎖医学の新しい展開」

生化学第一講座教授
遠藤 正彦



The 4th Meeting of
Hirosaki International Forum of Medical Science
弘前国際医学フォーラム 第4回学術集会

New Developments in Glycomedicine 糖鎖医学の新しい展開

October 17, 2000 Hirosaki, Japan
at Communication Center of Hirosaki University School of Medicine
2000年10月17日[火]
弘前大学医学部コミュニケーションセンター

Included lecturers
Yu-Teh Li (Tulane University School of Medicine)
"Glycobiology of GM2 in Man and Mouse"
Veer P. Bhavanandan (Pennsylvania State University)
"Glycosaminoglycans for the Treatment of Intestinal Cystitis: A Strategy to Improve Efficacy"
Richard I. Proia (National Institutes of Health)
"Glycosaminoglycan Function in Biology and Disease"
Mark D. Brown (University of Miami School of Medicine)
"The Rationale for and Results of Pre-clinical Trials of Chondroitinase ABC in Chondrolysis"



弘前国際医学フォーラム
第四回学術集会が十月十七
日(火)医学部コミュニケーション
センターで開催され
る。今回は、「糖鎖医学の新
しい展開」をテーマとして、
弘前大学医学部とその関連
施設の医学部研究者のみな
らず、国際的に著名な国内
外の研究者が一堂に会し、
最近の研究発表を公表し、
かつ討論する。

プログラムは「Metabolism
of glycolipids and pathology
(糖脂質の代謝と病態)」、
「The roles of N-glycans in tis-
sues (生体組織におけるN-
グリコシド型糖鎖の役割)」、
「Mucin as a biogenic messen-
ger (生体情報因子としての
ムチン)」、「Roles of
proteoglycans in tissue organi-
zation (プロテオグリカンの
組織機構における役割)」、
「New developments of gly-
cosaminoglycans for clinical
applications (グリコサミノグ
リカンの臨床応用への新展
開)」と題された五つのセッ
ションとポスターセッション
からなる。海外からのLi
教授 (Tulane University
School of Medicine, New Or-

leans, USA)、Proia 教授
(N.I.H., Bethesda, USA)、
Brown 教授 (University of
Miami School of Medicine,
Miami, USA)、Bhavanandan
教授 (The Pennsylvania State
University College of Medi-
cine, Hershey, USA) による
講演の他、鈴木明身博士(理
化学研究所)、古川清博士
(東京都老人総合研究所)、
今井浩三教授(札幌医科大学)、
木全弘治教授(愛知医
科大学)などの学外研究者
を含めた十四題の英語によ
る口演が予定されている。
また、ポスターセッション
には二十五題が発表される。
第四回学術集会の大きな
特徴としては、全三十四演
題の半数以上(二十四演題)
が弘前大学の学外からのエ
ントリーであり、これまで
開催されてきた三回の本
フォーラムの実績による広
がりを感じさせることがで
きる。

弘前大学医学部の研究発
展、国際化を目標として開
催される弘前国際医学
フォーラム第四回学術集会
への多くの研究者、学生の
参加を願っている。

去る八月二十一日、平成
十三年度に本学部の受験を
志望する高校生並びに高校
進路指導教員を対象として
学部説明会が開催された。
今年で四回目になるこの説
明会には、県内外から四十
八名の参加者があった。参
加者の内分は、津軽地区
二十名、青森地区十名、八
戸十三地区十五名、県外
三名(東京、大阪、高知)で
あった。

当日は十二時三十分から、
事務職員の方々が臨床研究
棟玄関で受付を開始した。
出席者に配布された今年度
の大学案内は、ねぶた絵の
表紙で「二十一世紀を夢見
る君へ」というサブタイト
ルのついた非常にカラフル
なもので、医学部の頁は医
学科と保健学科の案内が初
めて併記された解り易いも
のであった。

初めに参加者全員がクー
ラーの効いた臨床大講義室
に集合し、学務主任の鈴木
唯司教授から簡単な説明を
受けた。その後、遠藤医学
部長から弘前大学医学部の
歴史、現況、メデイカルス
クールへ向けた将来への展
望などが語られた。

次に、入試委員長
泉井 亮教授、学
務委員棟方昭博教
授から自己紹介と
受験生への期待が
述べられた。

学部説明会の最
初は、外科学第二
講座佐々木睦男教
授による模擬講義
が肝移植をテーマ
に行われた。講義
終了後、学生は三
班に分かれて、手
術部、薬剤部、脳研
究室、脳血管病態部門を
回った。

学部説明会開かれる

— 本学部志望の高校生に向けて —



人事異動

●医学部

辞職
12・6・30

皮膚科学 助手
水木麻唯子(無職)

解剖学第二 助手
田中 大(医員(研修医))

採用
12・8・1

皮膚科学 助手
泉谷 牧子(医員(研修医))

昇任
12・7・1

生理学第一 助教授
菅野 隆浩(医学部講師)

配置換
12・9・1

小児科学 助手
佐藤 工(附属病院産科センター)

●附属病院

復職
12・8・26

公衆衛生学 講師
清野 景好(派遣)

辞職
12・8・31

脳神経外科 助手
浅野研一郎(仙臺東脳神経外科病院)

採用
12・7・1

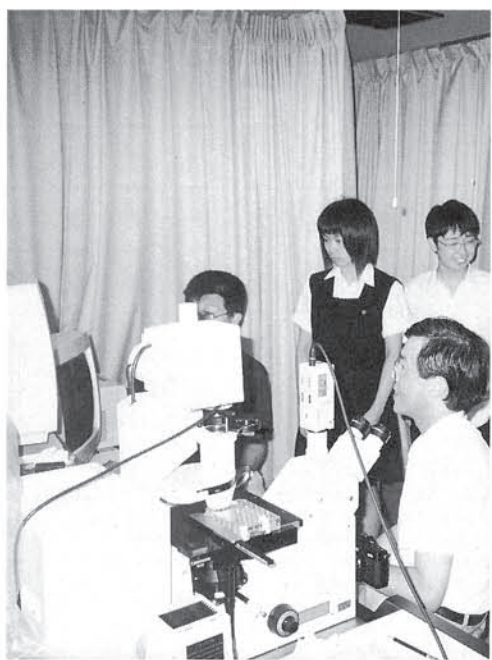
第一外科 助手
棟方 護(医員)

配置換
12・9・1

脳神経外科 助手
田中 雅彦(医員)

配置換
12・9・1

周産母子センター 助手
田中 幹二(医学部助手)



見学した。但し、手術部の見
学は昨年までと異なり、手
術部長の鈴木重晴教授が大
講義室で手術ビデオを供覧
するという形式に変更され
た。手術に関する知識は全
く無いにしても参加者には
印象が強く残ったものと思
われた。薬剤部の見学は病
院一階と地下一階の薬剤部
門を職員の見学を受けなが
ら熱心に見て回った。脳研
究室は脳血管病態部門の見学では、
佐藤敬教授ならびに吉田秀
見講師が最新の脳血管系の
研究成果を共焦点レーザー
顕微鏡と組織培養装置を用
いて懇切丁寧に説明して頂
いた。

三班に分かれた医学部・
附属病院の見学を終了後、
再度臨床大講義室に集合し、
質疑応答がなされた。参加
者の反応は概して少なく、
果たしてどの程度医学部や
附属病院の実情を理解でき
たか定かでない所も見受けら
れたが、説明会は医学部を
志望する学生にとって医学
と医療の現場を実感出来る
機会として有意義な催しと
思われた。真夏の非常に蒸
し暑い午後であったが、説
明会の準備と実施にあたら
れた関係者各位の御努力が
感じられる半日であった。

編集後記

☆本紙の編集は六名からなる
医学部広報委員会が担当
している。その委員長が佐
藤敬教授から新川秀一教授
に引き継がれ、小生(若林)
が新たにメンバーに加わっ
た。佐藤教授のこれまでの
御尽力に感謝するとともに、
今後より一層紙面の充実を
計りたいと考えている。

☆本号に「魅力ある弘前大
学医学部のためのアイデア」
の募集が掲載された。これ
は遠藤医学部長の発案によ
るものである。迫りくる独
立行政法人化への対応、医
療の多様化に向けての人材
の確保など現実に直面して
いる問題は大きい。いまや
国立大学医学部の統廃合が
取り沙汰されている中、真
に魅力ある大学として生き
抜き、走り続けるために、
皆が真摯に考え行動してゆ
く必要がある。本紙では今
後懸賞論文を継続的に募集
し掲載してゆく予定である。
☆ねぶたの夏も終わり、静
かな充実した季節を迎えよ
うとしている。そういえば
人生も季節に例えられる。
「青春」「朱夏」「白秋」「玄
冬」。実りの秋を迎えたい。

(若林 記)